

子どもたちの「心の在り方」を取り戻せ

東洋大学経営学部 非常勤講師

公益財団法人 日本進路指導協会 理事・調査部長

千葉吉裕

古いモノがなくなり、新しいモノが次々に生み出される時代、新しいコトに挑戦する人材が求められています。しかし、今の子どもたちは、失敗を怖れ、チャレンジ精神が低いという印象を持つ人は少なくありません。小さい頃は、失敗を繰り返しながら、能力を伸ばし、いろいろなことができるように成長してきたはずなのに、いつからか、失敗を怖れ、保身的な行動を取るようになることがあります。そんな子どもたちが増えてきてしまいました。なぜなのでしょう。

この疑問に答える研究をしている学者がいます。スタンフォード大学のキャロル・ドウェック教授です。彼女が書いた「mindset」という本は、日本語にも訳され、「やればできる!」の研究」という副題をつけて出版されています。TEDでも、登壇し考えを披露しているのですが、動画でご覧になった方もいるのではないのでしょうか。

彼女の研究を読めば、日本の子どもたちのチャレンジ精神が失われたのは、学校・家庭・受験産業によって、マインドセット、つまり、心の在り方を作り変えられてしまったからのようです。

成績による序列化を繰り返し、概ねの順位に変動がなくなる経験を積み、能力は生まれながらに決まっていると思ってしまうようになってしまっています。「褒める子育ては子どもを伸ばす」という考えに賛同する真面目な親は、事あるごとに褒め称えます。褒め

ることが悪いことではなく、何を褒めるかが重要です。「よく頑張ったね」と努力したことを褒めるのと、「賢いね」「頭がいいね」と、能力を褒めるのでは、子どもに対する影響は全く違います。良い成績を取った時にその出来を褒め、悪い成績を取った時には、怒ったり辱めたりする場合もあるでしょう。成績によって褒めたり怒ったりする大人の反応によって、成績で条件づけられた子どもは、悪い成績を取るようなテストを避けるようになり、うまくできない時は言い訳をすることが多くなるようです。そればかりか、学ぶことによって内容を深く理解したり技能を身につけたりするのはなく、良い成績を取るためのテクニックだけを身につけてしまうことになります。

受験産業の模擬試験は、能力は測れると思ひ込ませ、模擬試験で良い成績を取ることだけで、自己を成長させることができると思ひ込んでしまう子どもたちが増えてしまっています。受験勉強ばかりしていると、能力は多様であることを忘れてしまいがちです。筆記試験で問われる問題を解ける力が、万能な力と信じ、受験科目以外の教科科目を軽視したり、学校では身につけることができないう資質を伸ばす機会を逸してしまったりします。

新たなコトにチャレンジすれば、うまくできないことが当然起こります。対処することができなかった時、自己を伸ばす学びの機会と考えるか、それを失敗と捉え自己の能力が低いことを

さらす機会と考えるか、この価値観が人の行動を決めてしまうわけです。受験勉強ばかりしていて他の能力を伸ばしてこなかった子どもたちは、新たなコトに対する対処能力が乏しく、うまくできないことで自尊心が傷つくならば、新たなコトをやらなければよいという振る舞いをしてしまうわけです。

人生はうまくできないことの連続です。だから、人生は学びの連続であり、生涯にわたって成長し続けるのが人生です。うまくできない時を学ぶ機会ととらえ、新たなコトにチャレンジする心の在り方はとても重要です。キャロル・ドウェック教授は、心の在り方は一度身につけてしまっても変えることができると言っています。良い成績を取ることや、勝負で勝つことが成功ではなく、学び、向上していくことこそが人生の成功の鍵だということに気がつくことが大切だと言っています。能力は、生まれながらに決まっているものではなく、努力によって伸ばすことができるのです。

変化の激しい時代、変化に対応できるしなやかな心の在り方が欠かせません。チャレンジ精神の乏しい子どもたちが増えた背景には、子どもたちの褒め方、能力の多様性を理解し能力を伸ばす学びの機会を提供など、子どもたちを取り巻く大人の振る舞いがあります。

もう一度、子どもに対しての行いを振り返ってみていただけたら幸いです。